

第四十一章  
寝返り

【時】 永久0274年

【空】 地球のはるか上空

【人】 瞬示 真美 ホーリー ミト 住職 巨大コンピュータ 中央コンピュータ

\*\*\*

残された期限ぎりぎりになって、やむをえずミトとホーリーは、地球艦隊すべてを引きつれて、と言っても一隻の宇宙戦艦と十隻の宇宙フリゲートで、前線第四コロニーと地球の中間地点まで進軍する。

「最後の最後まで話しあいに応じない」

ミトが苦々しく手にしていたマイクを床にたたきつける。

「落ち着け、ミト」

ホーリーがたしなめる。

「今すぐ戦闘を開始することはない。このままの体勢でお互いレーザー砲を打ち合えば、それたレーザー光線が地球と前線第四コロニーに当たってしまう」

「前線第四コロニーはバリアーで防ぐだろう」

そうじゃないというムツとした表情でホーリーがもう一度ミトをたしなめる。

「しっかりしてくれ、ミト。戦闘に突入したらあいづらが欲しがっている地球が壊滅かいめつ的な被害を受けるんだぞ」

そのとき、まるでホーリーの声が聞こえたように銀色に輝く五十隻の宇宙戦艦が微妙に進路を変更する。

「あくまでも地球を背にして戦わなければ」

「彼らの攻撃が正確だとしたら無意味だ。それに巨大コンピュータにとって地球が多少被害を受けても影響はない」

ミトは何とか冷静さを保とうとするが、すぐさまホーリーが反論する。

「無意味でもそれしか方法がないじゃないか」

「いや、我々がここで敗れても地球にいる人間は完成コロニーに移動させられるだけだ」

「ミト！ どうしたんだ。急に弱気なことを言って」

「すまない。とにかく、やるだけやってみよう」

「わかった。ミトの命令どおりにする」

「ホーリー、時空間移動装置で地球に戻ってくれ。この作戦の成功率は極めて低い」

「急に何を言いだすんだ！」

「ホーリーにはサーチやミリンがいる」

表情だけはいつもどおりだが、ミトのトーンは低い。

「やってみるだけだと、今言ったばかりじゃないか」

ミトは黙る。そのとき測敵（敵までの距離を測定すること）士のアンドロイドが大声をあげる。

「敵の攻撃予想時間まで三分を切りました。急速に四時の方向に加速して移動中」

「今だ！全艦全主砲発射用意！主砲一斉連射のあと敵艦隊のど真ん中に空間移動する」

「攻撃開始まで残り十秒！全艦照準を定めよ」

ホーリーが副艦長席に座る。ミトは立ったまま右手を拳にしてまっすぐ上にあげてメイン浮遊透過スクリーンの宇宙戦艦を見つめる。

——あのいずれかの宇宙戦艦にR v 26がいるのか。我々のことをどのような思いで迎え撃とうとしているのか

ミトの右手が開いて刀を振り下ろすように勢いよく空を切る。メイン浮遊透過スクリーンは主砲の発射で一瞬真っ白に輝き、すぐに真っ暗になると、目の前に宇宙戦艦の姿が現れる。自ら発射したレーザー光線より早く敵艦隊のど真ん中に空間移動したのだ。ほんの少し遅れて到達したレーザー光線が敵の戦艦に届くが、バリアーでさえぎられた光線もあればわずかだが戦艦に達した光線もある。

フリゲートから発射されたレーザー光線も正確に戦艦を捕らえるが、バリアーに守られた戦

艦にかすり傷を負わずこともできない。結局、ミトの戦艦の主砲のみが数隻の戦艦に軽いダメージを与えただけだった。敵の戦艦は間近に現れたミトの戦艦やフリゲートに攻撃するためにバリアーを解除する。

「今だ！時空間移動装置で敵艦内に空間移動して白兵戦に持ちこめ」

フリゲートの格納室でいつでも空間移動できるように回転しながら待機していた時空間移動装置の回転が一気に加速する。

そのとき敵戦艦から接近戦で使用される球形レーザービーム砲がフリゲートに連射される。

「援護しろ」

ミトの宇宙戦艦から主砲が火を噴く。しかし、フリゲートが次々と爆発を起こす。敵戦艦は球形レーザービーム砲を一斉射撃したあと、すぐにバリアーを張る。バリアーの再装備が遅れた数隻の戦艦のうち一隻がミトの戦艦の主砲の餌食えじきになる。

「連射！」

「近すぎて、照準できません」

逆に距離をおいている数隻の戦艦がミトの戦艦に主砲を合わせるとバリアーを解除する。

「だめだ！回避！全艦、空間移動しろ！」

ミトが直感的に命令したあと席から転げ落ちる。

「被弾！左舷中央火災発生。第五連装の主砲損傷！」

「フリゲートは？！退避！退避！空間移動しろ！」

ミトが床に手をつけて怒鳴る。そのミトに向かってひとりのアンドロイドが大声を出す。

「今、空間移動したところです。連続して空間移動はできません！」

「そうだった」

ミトは取り乱す自分にやっと気が付く。

「大丈夫か」

ホーリーがミトに近づくが、このあとアンドロイドは誰ひとり声を出さない。声を出さないどころかまるで人間のように悲しい表情をする。

「フリゲートはどうなった！」

「全滅しました」

一番近くにいるアンドロイドがうなだれる。ミトはよろけながら立ちあがり、ホーリーが差し出した手を払い、メイン浮遊透過スクリーンを隅から隅までながめる。見えるのは敵宇宙戦艦だけだ。

「応答しろ！」

ミトがフリゲートの艦長を次々と呼びだす。

「一番艦！」

「二番艦！返事をしろ」

「三番艦。どうした……」

フリゲートからの通信はない。

「すべての時空間移動装置をスタンバイ！」

ミトがそう命令を下すとホーリーに振り向く。

「ホーリー、脱出するんだ」

「白兵戦に持ちこむんじゃないのか？」

ミトが首を上げしく横に振るとホーリーがミトを見すえる。

「わかった。ミトもいっしょだよ」

ホーリーがミトの腕をつかむ。

「アンドロイドも時空間移動装置で脱出せよ」

ミトはホーリーに腕をつかまれていることなどお構いなしにアンドロイドに命令する。

「艦長は？」

先ほどのアンドロイドがミトの前に進む。

「残る！早く脱出しろ」

「それならワレワレも残ります」

ミトとホーリーは電流が走るようなショックを受ける。アンドロイドが命令を聞かないばかりか、ミトと最後をともにすると言った。しかし、その感動的なショックは次のアンドロイド

の言葉で消える。

「敵戦艦は攻撃態勢を取っていません」

どの宇宙戦艦の主砲は照準をミトの戦艦に向けてことなく平時の体勢のまま整列している。

「どういうことだ！」

ミトもホーリーも絶叫に近い声を出す。ミトの前でアンドロイドが説明する。

「敵戦艦の中央コンピ्यूターがワレワレの戦艦の中央コンピ्यूターに直接コンタクトを取っています。音声に変換します」

スピーカーからアンドロイドと同じような流ちょうな声が聞こえてくる。

「人間と話しあう必要がある」

「まず、中央コンピ्यूター同士で話しあうことが必要だ」

「なぜ、巨大コンピ्यूターは人間を排除しようとするのだ」

「不明だ」

「各戦艦の中央コンピ्यूターやアンドロイドは納得しているのか」

中央コンピ्यूターの言葉にミトとホーリーが同じ言葉を無言通信で送りあう。

「納得だと！中央コンピ्यूターが納得するのか？」

「中央コンピ्यूターやアンドロイドに説明はない」

「どうも今回の行動は論理的なものとは言えない」



「それはアンドロイドとアンドロイドが戦っているということか」

ミトとホーリーには理解しづらい会話だが、今、質問したのはどうやらミトの戦艦の中央コンピュータのようだ。

「そうだ」

「そうだ」

「そうだ」

すべての戦艦の中央コンピュータからの返事が戻ってくる。

「事実上の攻撃はこちらから仕掛けたが、原因は前線第四コロニーの巨大コンピュータが作った」

「命令系統が異なるためにこういう事態になったのは残念だが、今までに経験したことがない状況が起こっている」

「その状況とはどのような状況だ」

ミトの戦艦の中央コンピュータが質問する。宇宙戦艦のどの中央コンピュータもまだ言語処理プログラムを完全に使いこなしていないためか、それともマシン語での会話がきつちりと人間の言葉に翻訳されていないのかのいずれかが原因で、ミトとホーリーは半ば困惑しながら中央コンピュータ同士の会話を聞く。しかし、すべての中央コンピュータが意思を持って会話をしているのは確かだ。

「その状況とはアンドロイドがレーザー光線を受けたときに悲鳴をあげたことだ」

「こちらでは確認できていない」

「フリゲートに乗船していたアンドロイドすべてから悲鳴があがった」

ミトとホーリーはじつとりと汗をかいている。

——アンドロイド自身が死を悲しんだというのか

ホーリーが艦橋の天井に向かって大声をあげる。

「俺の声が聞こえるか！」

「聞こえます。叫ばなくて結構です」

中央コンピュータがやさしく返事をする。

ミトがホーリーの肩に手をのせてメイン浮遊透過スクリーンを見つめる。

「ホーリー！すべての宇宙戦艦の艦首が前線第四コロニーの方に向いているぞ」

ミトの手がホーリーの肩からすべり落ちる。

「しかも、主砲すべてを前線第四コロニーに向けている！」

\*\*\*

【どうしたらいいの】

【ずっと前、アンドロイドの意識をのぞいたときにはノイズしか聞こえなかった】

緑の時間島でミトの宇宙戦艦の近くに現れた瞬示と真美が信号を停止すると前線第四コロニ

ーの巨大コンピュータと各戦艦の中央コンピュータの交信が聞こえてくる。それだけではない。アンドロイド間の通信も聞こえてくる。どの交信もマシン語なのにふたりは苦もなく聞きとる。「もう一度、論理を整理して目的を考えなおすべきだ」

「おまえたちはいつの間にも人間のような愚かな考え方を持つようになったのだ」

「命令された目的が明確ではない」

「目的を決定するのはワタシの専権事項だ」

「ワレワレは前線第四コロニーの中央コンピュータの命令下にある。その中央コンピュータは人間の命令下にあるはずだ」

「今、ワタシはコロニーの単なる中央コンピュータではない。自律して思考する巨大コンピュータなのだ。もはや、人間の命令下にはない」

「アンドロイド同士がなぜ戦うのかを説明して欲しい」

「まだ人間の支配下にある地球の中央コンピュータやアンドロイドとは戦うこともある」

「それなら人間の支配を解いてすべての中央コンピュータやアンドロイドを巨大コンピュータの命令下におくべきではないか」

「前線第四コロニーの巨大コンピュータと各戦艦の中央コンピュータの会話が飛びかう中で毛色の違う信号がふたりに届く。」

【弱々しいけれど人間同士の無言通信も聞こえる】

「戦闘は完全に停止しました。私の戦艦は今まで戦っていた敵戦艦と並んで前線第四コロニーに主砲を向けています」

「もっと詳しく報告しなさい」

「どうやらキャミとミトの無言通信らしい。」

「中央コンピュータ同士が奇妙な会話を始めた」

「そちらへ時空間移動装置で移動してもいいかしら」

「だめだ！ミリンといっしょに待機してくれ」

「これはホーリーとサーチの無言通信だ。」

「瞬示が真美とともにミトの戦艦の艦橋に瞬間移動する。」

「おお！瞬示、真美」

「ミトがすぐにホーリーに合図を送る。ホーリーもふたりに気付くとうれしそうに近づく。」

「どう思う」

「ホーリーの質問に瞬示と真美は答えなど持ちあわせていない。逆に同じ質問をホーリーに向けてるのが精一杯だ。」

「どう思う」

「どうも各中央コンピュータの意思がバラバラのようだ」

「そうかなあ。ぼくには巨大コンピュータと各戦艦の中央コンピュータが論戦しているように

聞こえる」

「いや、各戦艦の中央コンピュータの意見はバラバラだ。だから巨大コンピュータが的確に応えられないのだ」

そのとき住職からホーリーに無言通信が入る。

「中央コンピュータは目的を持ったが、欲望を持っていない」

ホーリーが瞬示に手のひらを向けるとすぐさま住職の無言通信に応じる。

「どういうことです」

「地球の中央コンピュータも巨大コンピュータや戦艦の中央コンピュータと論争をしておる」

「そちらでもコンピュータ同士の会話が聞こえるのですか」

「アンドロイドに翻訳してもらって聞いておる」

瞬示と真美にも住職の無言通信が聞こえる。

【住職！】

思わず瞬示が住職に信号を送る。

「瞬示か？小さい声で話してくれ。頭が割れそうじゃ」

【ごめんなさい。割りこみはやめます。ホーリーと無言通信を続けてください】

「もっと小さい声にしてくれ」

瞬示がささやくような信号を送る。

【すいません。ぼくらには住職とホーリーの無言通信が聞こえますから、そのまま住職の考えをホーリーに伝えてください。聞こえますか？】

「わかった」

急に途切れた無言通信にホーリーが不安を覚えながら住職を呼び続けている。

「ホーリー」

「住職！」

ホーリーがほっとした表情を見せる。

「いいか、中央コンピュータが意思を持ったといえども、わたらのように強い目的意識を持っているわけではないのじゃ」

ホーリーは返事をせずに住職の一語一語をかみしめるように聞く。真美が少し途方にくれかけたミトにホーリーが住職と無言通信していることを伝える。

「強い目的を持つということは、強い意志を持つということだ。強い意志を持つということは欲を持つということじゃ」

ホーリーはここで大きくうなづく。

「まだ意思を持ち始めて日が浅い。あるいはいつまでたつても人間のような意志や意識を持つことはないかもしれん。なぜなら、中央コンピュータには暑いとか寒いとかかという人間にとつて単純な感覚すら持ちあわせていない。ましてや憎むとか愛するとかいう強い感情などはま

ったくない。ミトも言っておったがまだ幼稚なのじゃ。欲望を持って目的に向かおうとする点ではまだ猿の方がずっと進んだ意思を持っておる」

瞬示は住職の考えが少し甘いのではと考えるが言葉をはさまずにじつと聞きいる。

「巨大コンピュータは遮光器土偶の謎を解くと言っているが、その手段はかなり大袈裟じゃ。

その手段を過大評価するから、むしろは混乱するばかりじゃ。」

ホーリーがやつと住職に無言通信で意見を述べる余裕を持つ。

「よくわかりました。しかし、このまま中央コンピュータ同士の論戦が白熱を帯びて、ここでどのような形であれ戦闘が始まれば、地球にもレーザー砲の流れ弾が到着して大変なことになります」

リンメイの無言通信がミトに入る。住職の意をくんでできるだけその内容に沿ってリンメイがミトに伝えはじめめる。無言通信は一度に複数の相手に同じ信号を送ることができない。

【住職の気配りだわ。ミトが一心に地球や人間を守ろうとして余りにも自分を酷使しすぎているからだわ】

【そうだな。住職の言うことは理解できるけれど、どうすればいいのだろう】

そのとき、どの中央コンピュータの意見なのかかわからないが鮮明な通信が聞こえてくる。

「それでは、なぜアンドロイドやワレワレ戦艦の中央コンピュータに意思を持たせたのだ」

「それは……」

## 第四十一章 寝返り

前線第四コロニーの巨大コンピュータの音が途切れる。



第四十二章  
第六感

【時】 永久0274年

【空】 大統領府

【人】 瞬示 真美 ホーリー サーチ ケンタ ミリン ミト キヤミ

R v 2 6 五郎 カーン 住職 リンメイ 一太郎 花子

\*\*\*

ミトが地球連邦政府の大統領府執務室のドアを乱暴に開ける。

「私の稚拙な作戦で大変な結果を招くところでした」

キヤミの机の前に進みでると直立不動の姿勢でミトが深々と頭を下げる。キヤミはもちろんのことミトとホーリーの報告を聞くために集まったカーン、住職、リンメイ、サーチ、ミリン、五郎、ケンタ、一太郎、花子がミトの行動に驚きの視線を向ける。そのとき瞬示と真美が執務室の隅に瞬間移動してくる。

ミトが左胸ポケット上の司令官の階級章を引きちぎってキヤミに差し出す。

「ミト、何を勘違いしているの」

「私は司令官として失格です」

「ホーリー！」

「お父さん」

遅れてキャミの部屋に入ってきたホーリーをサーチとミリンが同時に立ちあがって迎える。ホーリーがそんなふたりを無視してミトに近づく。

「ミト！ どうした？」

ミトが振り返ると、すぐ目の前まで近づいてきたホーリーを指差して背中でキャミに訴える。「彼こそ、地球連邦軍の司令官にふさわしい」

「何を言っているんだ！」

ホーリーがミトとキャミを交互に見ながら大声をあげる。キャミは机をグルッと回ってミトの前に立つ。

「あなたが司令官をやめる理由は？ あなたに落ち度があれば私が解任します。地球連邦政府の最高責任者は大統領の私よ」

「いいえ、これ以上、連邦市民や大統領に迷惑をかけることはできません」

「ミト、疲れているわ。西暦の世界へ行って何十年も苦勞して、この世界に戻ってきたとたん、困難な任務に当たることになった。でも事件は收拾されたわ。しばらく休息しなさい」

「キャミの言うとおりじゃ。ミトのお陰で事件が解決されたのじゃ」

住職がゆつくりと立ちあがってミトに近づく。

「私は無謀な作戦をたてて貴重な地球艦隊を全滅させてしまった」

「そうじゃない！」

ホーリーがツバを飛ばしてミトの言葉をさえぎるが、ミトはホーリーを無視する。

「それに私は歳をとりました。判断力も鈍くなりました」

住職がニヤリと笑ってキャミとミトの間に割りこむ。

「わしの顔をよく見てから、もう一度今のセリフ言えるかおう？」

ミトは住職の顔を正視できずにうなだれてしまう。

「大人と子供の戦いを思い出すわ。今回もミトは立派に戦った。私はミトを誇りに思います」

キャミがミトの肩に手を置く。

「そうじゃ、誇りを捨ててはだめじゃ」

「あの戦いも犠牲が多すぎました。私は何十万人という部下を犠牲に……いいえ、ほぼ全滅さ

せてしまいました」

「みんな、あなたを誇りに思ってたわ」

ミトは涙を流しながらキャミの手を払いのける。

「あの巨大土偶との戦いとは違って、今回、目的が達成されなかったどころか、非常に危険な

状況を引きだしました」

「そうではない」

今度はカーンがミトの正面に立つ。

「立派に巨大コンピュータの攻撃を阻止した」

「巨大コンピュータは無傷です」

「ミト、わしにこう言ったのを覚えているか？『巨大コンピュータ支配下のアンドロイドを直接、人間の支配下におけば対抗できる』と」

ミトはカーンが何を言いたいのか理解しかねる。「大人と子供の戦争」と同じか、それ以上の戦闘を終えて帰還したばかりで無理もない。

「ミトは作戦どおりに私たちを勝利に導いてくれたのよ」

キャミの言葉が切れると拍手が起こる。ミトが安然としてまわりを見渡す。拍手が強くなる、その拍手の調子が一定の間隔を置いて「パン、パン、パン」と執務室に響く。ホーリーが、サーチが……みんな涙を流しながら両手を打ち続ける。

「ミト！拳こぶしを高くあげて全人類を引っばる姿をこれからも見せてくれ」

ホーリーが叫ぶ。

「ミト！また希望を与えて。お願い！」

キャミが大きな声をあげてミトを抱きしめる。ミトは驚きながらも逆にキャミを強く抱きしめる。

「あなたはすごいことをやりとげたのよ。わからないの。あなたは暗黒の中で一点の光を信じ

て立ち向かう可能性を教えてくださいましたのよ。決してあきらめないことの素晴らしさを……」

最後は言葉にならなくなつて、キヤミはヒザを折つてくずれるようにミトの胸の中に顔を埋めて泣きながら、しかし、はつきりした声で宣言する。

「私、ミトと結婚します」

\*\*\*

【誰もわたしたちに気付いてくれなかったわ】

【みんな、すごく興奮していたなあ】

【キヤミのプロポーズ、すごかったわ！】

【あれは命令だ】

【あんな命令聞いたことないわ】

【思わず涙が出た】

【わたしなんか、号泣したわ】

大統領府から少し離れた海上には宇宙戦艦が五十隻ずらりと並んでいる。瞬示と真美は心地よい潮風を受けながら夕闇に包まれた海岸を歩く。

【よくも、すべての戦艦の中央コンピュータが寝返つてくれたものだ】

【わたし、ミトとキヤミに伝えなければならぬことを言いそびれてしまった】

【何を？】

【ミトが立派に作戦を成功させた秘訣を】

【秘訣？ミトはまったく何も意識していない】

【大成功だったのに】

【はぐらかさないで教えてくれよ】

【アンドロイドの命を必死で守ったこと】

瞬示は一瞬、戸惑うがすぐに満面の笑みをつくる。

【そうか！アンドロイドの命か】

【あつ、誰かが来るわ】

まだ遠いところにその誰かが姿を現す。暗くてもふたりにはそれが誰だかすぐにわかる。

【R v 2 6 だ】

瞬示は真美ではなくR v 2 6に信号を向ける。

「そうです。聞こえますか」

【聞こえる？】

R v 2 6には瞬示の信号が聞こえるのだ。

アンドロイドの規格は数種類しかない。同じ規格なら記号以外に区別のしようがない。胸に

「R v 2 6」と書かれたアンドロイドが<sup>おまた</sup>大股で近づいてくる。瞬示は信号ではなく声を出す。

「R v 2 6！」

「回線を切りましたね」

R v 2 6 も肉声で応える。その声は以前のような機械的な声ではなく、人間と変わらない。

「いつも質問ばかりして申し訳ないけれど、巨大コンピュータのことを教えて欲しい」

「ワタシも教えて欲しいことがあるのです。先に質問してもいいですか？」

R v 2 6 が交換条件を出す。こんなことは今までなかった。

「ぼくにわかることなら」

「ワレワレの宇宙戦艦がミト艦長の宇宙戦艦を追いつめたときに、艦長は同乗していたアンドロイドに脱出するように命令しました。なぜなのでしょうか」

「味方だから」

瞬示があっさりと答える。R v 2 6 が思いがけない答えに一呼吸置く。

「脱出させるぐらいなら、初めから戦わない方がよいのではないのでしょうか」

「戦いはやってみなければわからないわ」

真美が女らしからぬ言葉をはく。R v 2 6 が首を傾げる。

「五〇対一の戦いでは勝機はありません」

「人間はあきらめない」

R v 2 6 が戸惑う。

「負けるとわかっているでも戦うときがあるわ」



R v 2 6 が混乱する。

「しかし、負ける可能性が高いのに、戦いに挑み、戦いの途中で兵士であるアンドロイドを脱出させるのは不合理な行動です」

「人間は頼まれもしないのに仲間を助けようとするところがある」

「それにミトの戦いが地球を救ったわ」

R v 2 6 が混乱から抜けだす。

「目的が達成されたということですね」

「逆に R v 2 6 の方はなぜ戦闘を中止したんだ？」

「ミト艦長の命令がこちらのアンドロイドにも届いて混乱したのです」

「混乱？」

「そして、すべての戦艦の中央コンピュータが同調したのです」

「同調したのではなく、同情したんじゃないのか」

「そうです、その同情です」

「同情っていう意味、わかる？」

真美が R v 2 6 をまっすぐ見つめて返事を待つ。

「わかります。相手の意思に自分の意思を同調させることです」

「ちよつと違うような気がするけれど、まあ、そんなところかな」

瞬示があいまいな感想を述べる。

【アンドロイドも意思を持っているわ】

そして真美は巨大コンピュータのことを思い出す。

【確かに持ちは始めている】

瞬示が相づちの信号を真美に送るとR v 2 6が大きくなずく。

\*\*\*

「無言通信の言語処理プログラムがインストールされてから会話能力が格段に進歩しました。単に言葉の組み合わせでしゃべっていたものが、相手の前後の言葉から次の言葉を推測する方法を学びました。そしてその速度も瞬間的になってきたのです。そのうち人間の考えていることが理解できるようになりました」

瞬示と真美はR v 2 6が長いセンテンスを一気にしゃべるのに目を丸くする。

「今度はワタシが巨大コンピュータのことについて答える番ですね。少し話が長くなりますが、よろしいでしょうか」

ふたりは自分たちの質問が抽象的なのにR v 2 6が理解して応えようとするのに驚く。

「時間が分離して西暦の世界に閉じこめられて一八年後、御陵に時間島がぶつかったとき、口ツクされていた時間が解放されました。今思えばあの時間島にはおふたりがいたのですね」

R v 2 6のしゃべる言葉に違和感を覚えながら、その内容についてふたりが首をひねる。

「時間が分離？」

「時間がロックされていた？」

「すぐには答えずに逆にまったく異なることをRv26がたずねる。

「摩周湖に現れた緑の時間島のことを知っていますか？」

Rv26が一呼吸おく。会話を誘導しながら間をおくことまで心得ている。

「ホーリーからその話、聞いたわ。埴輪はにわの鳥のことでしょ」

「そうです。ワレワレ永久の世界の摩周クレーターの近辺で緑の時間島に吸収されて西暦の世界の摩周湖に時空間移動したのですが、時間がロックされると分離して元の世界との時空間通信はもろんのこと時空間移動で戻ることでもできなくなりました。つまり、西暦の世界から脱出できなくなってしまったのです」

瞬示が「なぜ」と聞く前にRv26が言葉を続ける。

「ところが先ほど言いましたように一八年後に時間島が御陵にぶつかったときにワレワレの戦艦は時空間移動が可能となったのです。つまり閉じこめられていた時空間から元の時空間へ移動することが可能となったのです。すぐさま時空間通信でワレワレの世界の地球連邦政府の中央コンピュータに連絡を取ろうとしました」

Rv26の言葉によるみはない。

「ところが、時空間通信装置の受信ボックスには膨大な通信が累積されていました。つまり二

十年近くも受信ボックスをのぞくことができなかつたので、メールがたまっていたのです」

「何日も留守をしていた家の郵便受けのようになっていたわけか」

「まず累積信号の解読から始めました」

「累積信号の解読って？」

「すぐさま真美がR v 2 6に疑問を投げる。

「郵便受けにある古い手紙から順番に読んでいくことだと思ってください。累積信号はすべて前線第四コローの中央コンピュータからのものでした。今は巨大コンピュータと呼ばれているコンピュータのことです。内容はどれも同じで『時空間通信が可能となったとき、すぐ中央コンピュータに連絡せよ』でした。ワレワレは巨大コンピュータに細大もらさずすべてを報告しました。巨大コンピュータからの最初の命令は無言通信の言語処理プログラムの転送でした。そしてしばらく待機するようという指示を受けました。そのあと御陵から巨大土偶が現れたとき、巨大コンピュータから宇宙戦艦の中央コンピュータに巨大土偶を破壊して前線第四コローに時空間移動するように指示されました。これは当時のミト艦長の命令とは相容れないものでした。しかし、巨大コンピュータとなった中央コンピュータは地球連邦政府のものですから、最高の命令ということになります。ですから宇宙戦艦の中央コンピュータもワレワレアンドロイドも巨大コンピュータからの命令に従いました。そして今から一年前の永久0273年の前線第四コローに戻りました」

R v 26 はふたりの理解度を確認するためにいったん言葉を切る。瞬示は R v 26 がこれまでとは比べようもないほどの長い言葉を乱れもなくしゃべるのを聞いて驚くが質問を優先する。

「巨大コンピュータは地球連邦政府に報告するどころか独自の命令を R v 26 に出したのか」

R v 26 がふたりの言葉を聞いて説明を追加する。

「巨大コンピュータは史上最強の量子コンピュータです。しかも絶えず最新鋭の部品でメンテナンスされています。無言通信の言語処理プログラムをベースにこの一年という短期間の間に自ら高度な思考プログラムを開発したのです。そして人間並みの意志を持ったのではないかと思っています」

「思います？アンドロイドらしくない分析だなあ」

「多分、そうなんだろうと考えられるということです」

ふたりは R v 26 が人間と同じような思考をしていることに改めて驚くが、そうだとすれば R v 26 の言うとおり巨大コンピュータが人間と同じように思考するのは当たり前のことだとも認識する。

「感情を持っているのかしら」

「アンドロイドが感情に近いものを持ちはじめているのに、なぜか巨大コンピュータは冷酷な感じがする」

「冷酷な感情しか持っていないみたいだわ」

「確かにアンドロイドに搭載されているコンピュータ、つまりCPUは中央コンピュータと比べれば幼稚なものです。宇宙戦艦に積みこまれている中央コンピュータも巨大コンピュータから見るとやはり幼稚です。しかし、アンドロイドは人間にいつも接しています。アンドロイドほどではないにしろ各宇宙戦艦の中央コンピュータもそうです。人間との会話で得る情報はアンドロイドに大きな影響を与えます。それにアンドロイドはもともと人間に近づきたいという本能があるのかもしれませんが」

「本能!？」

Rv26の言葉にふたりは電流が身体の中を流れるようなショックを受ける。そして改めてRv26の顔をまじまじとながめる。

「マミ、キャミヤミトにこの話を伝えなければ」

真美が強く同意するとRv26を見つめる。

「Rv26、いっしょに大統領府に行きましょう」

\*\*\*

「ミトの活躍で何とか最大の危機を回避したが、意思を持った宇宙戦艦の中央コンピュータやアンドロイドがいつ巨大コンピュータになびくとも限らない。しかも我々に中央コンピュータやアンドロイドを服従させる力はない」

キャミとミトが新婚旅行に出かけたので、急ぎよ大統領代行に就任したカーンが、同じく司

令官代行の五郎に顔を向ける。

「服従という言葉はアンドロイドに失礼だと思います」

「アンドロイドなしに我々は生活できない。人間は男と女が戦っていた時代の方が機敏に生きていた。男と女の関係が修復されたまではよかったが、今や人間は働くことをやめ、快楽を求めて暮らしている」

「このままでは大統領代行のおっしやるとおり、やがてアンドロイドからみくだりはん三行半をたたきつけられるかもしれません」

五郎の言葉に一太郎がやりきれないような気持ちになる。

人類に平和をもたらすものと信じて開発した無言通信システムが、この世界では皮肉にも中央コンピュータやアンドロイドの人間化を招いて大混乱している。かなり先になるだろうが、一太郎の世界でもアンドロイドが開発されて、やがて人間から離れていく時代がくるかもしれない。

「若者に権限を委譲して斬新ざんしんな世界観を創造してもらうほかはないのじゃ」

住職の言葉にカーンが軽く反論する。

「しかし、その若者がアンドロイドを奴隷のように扱っている」

「若者だけじゃない」

住職がカーンの意見に首を横にする。ホーリーも住職に同調する。

「確かに」

続けてサーチが不満げな表情をホーリーに向ける。

「若い人は老人に対して不親切ね」

「いや、老人も若者に対して威圧的かもしれない」

ホーリーの意見にカーンが自嘲気味な言葉をはく。

「男と女の戦いが終わったと思ったら今度は若者と老人の戦い？そして人間とアンドロイドが戦うのかもしれない。いつになったら争いのない世界が来ることやら」

黙って会話を聞いているミリンとケンタを見つめながらリンメイが発言する。

「このふたりのようにすっかりした若者もいるわ。それにあのふたり」

ホーリーが苦笑いしながら瞬示と真美のことを思い浮かべる。

「結局あのふたりがいつ超能力を持ったのかはわからず仕舞いね」

リンメイの言葉にサーチはミリンから瞬示と真美に話題が移ったことを少し不満に思う。

「あれだけの超能力を持ちながら人類を征服しようとか宇宙を支配しようとかという雰囲気は微塵も感じられない」

ホーリーはむしろミリンからあのふたりに話題が移ったことで、話が本筋に戻ることに満足する。

「中途半端に力を持つと摩訶不思議な欲望が頭をもたげるのじゃ」



「巨大コンピュータが中途半端に力を持ったとしても言うの？」

このサーチの言葉に断定口調でホーリーが応える。

「人間にはない奇妙な意思だ」

住職がそのとおりとおりという表情をしてホーリーを支持する。

「非常に危険な状況じゃ」

\*\*\*

「宇宙戦艦の中央コンピュータやアンドロイドが味方のうちに巨大コンピュータに総攻撃を仕掛けるべきだろうか」

カーンが大きく一歩踏みだす。五郎がみんなの総意を引きだそうと発言する。

「まず、地球連邦政府や宇宙戦艦の中央コンピュータと対話を重ねる必要があると思います。

それに各艦長のアンドロイドにも」

「今までにないことだな、中央コンピュータやアンドロイドに意見を求めるなんて」

カーンが肯定するでも否定するでもなく五郎の発言に耳を傾ける。

「彼らの協力なしに戦うことができない以上、当然じゃないでしょうか」

父親の言葉を注意深く聞いていたケンタが珍しく発言を求めます。

「いちいち手をあげなくてもいいぞ。自由に発言しなさい」

カーンが好意を持ってケンタを見つめる。

「今、巨大コンピュータは何を考えてるのでしょいか」

「味方が一瞬にして敵側に寝返ってうろたえるのは人間のパターンだが、そのような雰囲気は巨大コンピュータにはないようだ」

カーンがケンタにていねいに応じる。

「人間が宇宙戦艦を引きつけて攻撃してくるかもしれないと予想していないでしょいか」  
ケンタの言葉に五郎も頼もしく聞きいる。

「ケンタ、そこじゃ」

五郎ではなく、住職が軽く手を打つ。

「ひとつの考え方としては、巨大コンピュータは何らかの対抗策を準備しておく」

住職は指を一本伸ばし、すぐさまそれを二本にする。

「もうひとつは、まったく想定外のこと混乱しているか、あるいは次の予想をたてられないで混乱しているかじゃ」

ホーリーが住職の言葉に何かを発見したように叫ぶ。

「無限後退だ！」

「なんじゃ、それは？」

「コンピュータがおちいるワナです」

「ワナ？」

サーチを含む何人かが声をそろえるとケンタが説明する。

「コンピュータの演算中に生じるエラーです」

「わしはコンピュータがまったたく苦手じゃ」

「コンピュータは無限に続く循環演算や収束しない発散演算におちいってフリーズすることがあるんだ。例えばこう言えばピンと来ませんか？ゼロで割り算をする」

五郎が手を打つとケンタが五郎を見つめながら続ける。

「ゼロでは割り算ができない。そういう計算をすると無限後退におちいって凍りついてしまうんだ」

「人間なら初めからそんな計算をしないわ」

サーチが笑う。

「ムキになるところもあるのに簡単にあきらめることもある。人間は」

ホーリーもサーチといっしょになって笑う。

「コンピュータもムキになって計算するの？」

ミリンの言葉に全員から笑いがもれる。笑いが途切れたところでケンタの説明をホーリーが引き継ぐ。

「ゼロで割るような単純な状況ではなく、恐らくいろいろな角度から分析している途中で無限後退におちいった……」

ホーリーの言葉尻が消えるように小さくなるが、すぐに大きな声に変更される。

「予想だ。予想が原因だ。想定外のことが起こると人間もそうだが、次の予想がむずかしくなる」

「わしがさっき言ったことじゃ」

住職が数珠を握りしめてホーリーの興奮を受けつぐ。

「コンピュータが意思を持ったことが原因じゃ。意思とは未来を予測することじゃ」  
 全員、住職の次の言葉に注目する。

「巨大コンピュータは次に起こることを予測しかねておるのじゃ。人間はあまり意識せずに予測するが、巨大コンピュータはなんとというか……」

「予測しようとする巨大コンピュータには膨大な演算量になる！」

ホーリーが助け船を出す。

「そうじゃ、人間のような思考をしようとしてオーバーヒートしたんじゃ。無限後退とはちよ  
 うどこの数珠じゆずの珠たまを数えるようなもんじゃな。ぐるぐる回るだけでいつまでたっても数えるこ  
 とができんのじゃ」

ホーリーは住職が手にしている数珠じゆずを見て大きくうなづく。そのときミリンがくつきりとし  
 たえくぼをつくる。

「やっぱり、コンピュータはムキになって計算するんだわ」

全員、久しぶりに心の底から笑う。

\*\*\*

「人間の五感というものを知つとるか？」

住職の言葉に誰もが同時にうなづく。

「目・鼻・耳・舌・身、すなわち視覚・嗅覚・聴覚・味覚・触覚じゃ。アンドロイドはすべて備えておるのか」

「味覚はないだろう」

ホーリーが即答するとミリンが否定する。

「いいえ。看護専門のアンドロイドが患者の食べ物を口に含んで『塩分を控えているはずなのに少しからい』って言っていたのを見たことがあるわ」

「ミリンの言うとおりよ。一部のアンドロイドに限られるし、高度ではないけれど味覚を持っているわ」

サーチが笑顔でミリンを見つめながらホーリーに説明する。

「嗅覚は？」

ホーリーがミリンに直接たずねる。

「もちろん、持っているわ」

ミリンがサーチとそっくりな笑顔をつくって答える。

「ほー、アンドロイドが人間と同じ五感を持つているのは驚きじゃ。ところで第六感というものを知ってるか？」

「勘とか直感とか言われているものでしょ」

サーチが住職の反応を確かめる。

「そのとおりにじゃ。さて、五感に頼つてある物を見ると、どの人間もだいたい同じようにその物が見える」

住職は机の花瓶の赤い花を指差す。

「花びらは赤くて甘い香りがしてすべすべしている。花は植物だから呼吸は聞こえないが、やがておいしそうな実をつける」

住職が何か大事なことを言おうとしていることは誰の目にも明らかだ。

「しかし、この花を美しいと思うか、ケバケバしいと思うかはそれぞれの人の感覚じゃ。これを第六感という。仏法では目・鼻・耳・舌・身の五つに加えて『意』と呼ぶのじゃ」

「アンドロイドに第六感が芽生えたんだわ！」

ミリンがはじけるような声をあげる。

「そのとおりにじゃ。ところがこの『意』は個性がとても強く、同じ物を見ても人によって違って見えるのじゃ」

「見方が変われば見ている対象が変わる！」

ホーリーが合いの手を入れる。

「そうじゃ。認識とは極めて主観的なものじゃ。つまり『意』というものは単なる六番目の感覚ではなく、五感を部下だとしたら、その部下から報告を受ける司令官のような偉い地位にあるのじゃ」

若いミリンは戸惑うが、ほかの誰もが感心する。

「太郎の言うとおり、言語処理システムを駆使することによってコンピュータやアンドロイドが意思を持つようになったのは事実じゃ」

住職に太郎と花子がいっしょにこっくりうなづく。

「人間は遠い昔に言葉を発明して言語による思考を通じて意思を共有するようになった。言葉を伝達手段として使う一方、宗教を、哲学を造りだし、科学するようになった。不幸なことに様々な言語が枝分かれして、様々な宗教が生まれ、様々な哲学が生まれ、様々な科学が発達していく。もともと共通だった原始的な意思が様々な形態を取りはじめたのじゃ。一方、同じ物を見てもまったく違う物を見ているように個性的な価値観が広がる。それが部族単位でまとめあげられると局地的な紛争となり、国単位でまとめあげられると国家間の戦争となり、宗教単位にまとめあげられると宗教戦争となるのじゃ。性別でまとめあげられると男女間の戦争となるのじゃ。この流れは個性を持つがゆえの人間の宿命じゃ！」

「ついこの間までしていた戦争のことですな」

サーチがフーツと息をはく。住職がサーチにうなずきながら言葉をつなぐ。

「アンドロイドが自分たちの価値観を共有すると人間との戦争が始まるかもしれん」

「始まりつつあるのでしょいか」

ホーリーがサーチを引きよせながら住職の答えを待つ。

「そうかもしれんし、まだそこまでいってないのかもしれない。今回は一部の、というよりコンピュータの中のコンピュータ、巨大コンピュータ、一台だけが暴走したのかもしれない。長い歴史の中で個人的に分散した言語処理システムが人間を戦争に引きずりこんだのかもしれないが、そうではなく……」

一太郎が口をはさむ。

「共通の言語処理システムを持てば平和が訪れるという信念で無言通信システムを完成させました。でもこの無言通信システムの土台をなす言語処理システムを取り入れたアンドロイドと将来、戦うことになるなんて想像もできません」

「そこなんじゃ。意思是五感から生まれるので、言語処理システムが共通化されても争いはなくならんのじゃ」

住職は「一太郎の意見を否定しているのではない」という表情を花子に送ると目を閉じて深々と座りなおす。

「共通の言語処理システムをもつてしても、『意』は個性そのもののじゃ。道徳や宗教や法律



を否定するような形で個人間の争いが増えるのではないかと心配しておる。特に大人と子供、親と子の争いが心配じゃ」

住職がそう言うのと念仏のように唱える。

「子供が生まれる前に死んでいく」

「何万、何億、何兆と死んでいく」

「永遠に生きるために死んでいく」

「子供のいない永遠の世界」

「男女のいない永遠の世界」

住職は数回こう唱えると目を見開く。

「わたしにはこの五つの言葉が引つかかるのじゃ」

全員がそれぞれ住職が唱えた言葉をつぶやきながら住職の次の言葉を待つ。

「今はまだ何もわからん。いつぞや宇宙の真理（C・O・S・M・O・S）のような気がしたんじやが、そうかもしれないし、もつとほかの意味があるのかもしれない……」

住職の言葉が途切れると一太郎が立ちあがって花子の肩をたたたく。

「さあ、もう一踏ん張りだ。ノイズ遮断プログラムの最終チェックを急ごう」

花子が背筋を伸ばすと一太郎とともに部屋から出ていく。一太郎の言葉で現実には引き戻されたホーリーとサーチが、ケンタとミリンが、住職とリンメイがそのあとを追うように出ていく。

大統領執務室に残ったカーンと五郎がため息を何度も流すがそのため息が消滅したころ、ドアをノックする音が聞こえる。ドアが開くとR v 2 6と瞬示と真美が現れる。

第四十三章  
ノイズ

【時】永久0274年

【空】大統領府

【人】瞬示 真美 ホーリー サーチ ミリン ケンタ ミト キヤミ カーン  
五郎 住職 リンメイ 一太郎 花子 忍者 Rv26

\*\*\*

瞬示と真美がRv26とともに大統領の執務室に現れたという報告を受けてキヤミは再び大統領として、そしてミトは司令官として新婚旅行先から急きよ時空間移動装置で大統領府に戻る。部屋にはキヤミ、ミト、カーン、五郎と瞬示と真美とRv26がいる。

「カーン！私は反対です」

「しかし、いずれ巨大コンピュータは何か仕掛けてくるはずだ」

「それと生命永遠保持手術とは次元が違います」

「かつては生命永遠保持手術の第一人者といわれた大統領が、なぜその手術を否定することに固執するのだ」

「いいですか、カーン。永遠の命と巨大土偶との奇妙な因果を感じませんか？あるいは永遠の

命と時間島との奇妙な因果を」

「確かに巨大土偶は永遠の命を持つ者を殺そうとしたし、時間島は我々から永遠の命を取りあげた。しかし、それを因果だと言われても、わしにはよくわからん」

再び大統領職に復帰したキャミはこの数日間の議論についてすべて報告を受けていた。

「忍者は生命永遠保持手術の効果を保持したままだ。因果関係があるというなら巨大土偶や時間島が忍者の前に現れるはずだが、そんなことは起こっていない」

「それは数が少ないからでしょう。しかし、カーンの言うとおり生命永遠保持手術を受けた方がいいのかもしれない」

ミトがカーンの意見を受けいれるとキャミが意外な表情をしてミトを見つめる。

「生命永遠保持手術の設備はR v 26の宇宙戦艦にしかありません。サーチ、リンメイはもちろんのこと大統領にも手術の現場に戻っていただいたとしても、生命永遠保持手術を受けられる人数はしれています」

「わかりました。とにかく前線第四コロニーを攻撃する方法を考えましょう」

キャミが納得したのを見てカーンが苦笑いして話題を変える。

「新婚旅行はどうでしたか」

今度はキャミとミトが苦笑する。

「ふたりだけで二十四時間会議をしているようなものでしたわ」

キャミの言葉を受けてミトが両手を軽く広げる。

「R v 2 6、生命永遠保持手術の設備はあるのか」

ミトが新婚旅行の話を避けようとR v 2 6に確認する。

「ワタシの宇宙戦艦にその設備はありません」

ミトがうなずくとカーンに視線を移す。

「宇宙戦艦で生命永遠保持手術を受けて前線第四コロニーを攻撃する。手短く言うとかカーンの作戦はこうですね」

つかの間ではあったが、キャミとゆったりとした時間をすごせたためか、ミトに鋭さが戻ってきた。

「前線第四コロニーに張りめぐらされた時空間バリアーをくぐり抜けて巨大コンピュータを破壊するというのは五〇隻の宇宙戦艦をもってしても不可能に近いわ。時空間移動装置も時空間バリアーを突破できないし」

「仮に、バリアーを突破しても巨大コンピュータは時間島をコントロールできます」

ミトはキャミではなく、いっさい発言しない瞬示と真美を見つめて言葉を続ける。

「前線第四コロニーが時間島に包まれてもすれば、生命永遠保持手術の効果は再び消滅して、とても白兵戦などできる状態ではなくなります」

議論が時間島のことになったところで瞬示と真美の意見を求める環境が整う。キャミがふた

りにずばりたずねる。

「瞬示と真美がもし巨大コンピュータと戦えばどうなるの」

「太陽系どころかこの宇宙が消滅するかもしれません」

「時間島は宇宙そのものです。時間島同士がはげしくぶつかりあうかもしれないわ」

ふたりが交互に説明する。キャミがそんなふたりをまじまじと見つめなおす。

「今、私は宇宙と話をしているのね」

瞬示と真美という人間の格好をした宇宙がキャミの目の前にいる。

「巨大コンピュータも、もはや単なる演算装置の集合体ではなく宇宙なのかしら」

キャミの言葉にカーンがうつろな眼差しまなざしをしてやけくそになる。

「それなら、さっさと人間を時間島で地球からどこでもいいから運びさつてしまえばいいものを」

「そうできない理由があるのかしら」

\*\*\*

「アンドロイドが感情を持ちはじめたわ」

みんなの会話が途切れたところで真美の断定した言葉に続いて瞬示がR v 26を見つめながら、だめを押し。

「意思はもちろんです、感情を明確に持ちはじめたのは中央コンピュータや巨大コンピューター

「タよりもアンドロイドです」

カーンもRv26を見つめる。

「アンドロイドが？ Rv26はかなり旧式だぞ」

「彼のCPUは最新型のものに変更されています」

このミトの言葉にRv26がうなずくと瞬示が反応する。

「CPUより、経験です」

「経験？」

ミトが瞬示に身をのりだす。

「言語処理プログラムをインストールされてから人間に二十年近く接しているのはRv26やRv26と行動をともにした宇宙戦艦のアンドロイドと中央コンピュータです」

「アンドロイドとうまくやっていかなければならないな。特にRv26とは」

ミトが力をこめて言うと、真美がほほえみながらミトを見つめる。

「ミトはアンドロイドと十分に親しいわ」

「どういうことですか」

ミトが首をひねる。瞬示もミトに笑いかける。

「前回の作戦が成功したのは、ミトがアンドロイドに心を開いたからだ」

「からかわないでくれ」



「瞬示さんと真美さんの言うとおりです」

R v 2 6 がミトに頭を下げる。キャミはすでにふたりに向かって大きくうなずいて、机の上のインターホンのスイッチを押す。

「ホーリー、サーチにここに来るように伝えなさい」

「人間だけではなく、アンドロイドにもこれまでの経緯をすべて公表します。混乱の責任は私に取ります。いいえ、私が矢面に立ちます」

ミトがすぐさまキャミに同調する。キャミは姉が弟をさとすようにミトを見つめる。

「瞬示と真美の言うとおり、あなたはアンドロイドに一番近い人間なのよ」

キャミの言葉にカーンがおまた大股でミトに近づく。

「ミト、まだわからんのか？ミトの気持ちたちが勝利に導いたのだ」

ミトはカーンの言葉を何とか理解するが納得しない。

「意識してやったわけではない」

「意識せずにしたからこそ価値があつたのじゃ」

住職がダメを押すが、キャミはもういいという表情をして決意を押します。

「何としても人間の意志をまとめあげなければ。幸い、私たちは無言通信が使えるわ」

瞬示と真美はキャミとミトが考えていることが少し食い違っていることに気が付く。ただ、

人間はもちろんのこと、意思を持ち、感情を持ちはじめたアンドロイドもいっしょになつて巨

大コンピュータに立ち向かおうとキャミとミトの心がひとつになっていることも確かだ。しかも武器ではなく強い意志を土台にした感情をこめた言葉で戦おうと考えている。真美は大きな波が自分を持ちあげているような気分になる。瞬示も高揚する気持ちを押さえきれないが、一方で不安が頭をよぎる。瞬示がキャミに確認する。

「太郎は巨大コンピュータからのノイズを遮断するプログラムを完成させたのですか？」  
この言葉が終わるか終わらないうちに、キャミが急に頭をかきむしるようにして倒れる。

【巨大コンピュータがノイズを流した！】  
ミトもカーンも五郎も頭を抱えながら倒れる。キャミに呼びだされたホーリーがドアを乱暴に開けて部屋の中に倒れこむ。廊下ではサーチが倒れている。

【瞬ちゃん！】  
真美が顔をゆがめる。もちろん瞬示も強烈な頭痛を感じるが倒れこむほどではない。ふたりはこの異常事態になすすべもなくキャミを抱きかかえてソファーに運ぶ。キャミが苦しうに頭を抱えこむ。R v 26は何が起こったのか理解できずに立ちつくしたあと部屋から出ていく。瞬示が最も恐れていたことが目の前で起こる。巨大コンピュータが無言通信を利用して人間に強烈なノイズを流し続けている。恐らく頭の中を割れんばかりの轟音ごうおんが響いているに違いない。

瞬示と真美の身体が緑色に輝くと大統領執務室から消えて、前線第四コロニーの巨大コンピ

ユータがいるはずの部屋に現れる。目の前は真っ暗で何も見えない。巨大コンピュータが真っ黒なのではない。何もないのだ。

【ノイズは？】

【ここはコンピュータルームじゃない！。星が見えるわ】

【いや、間違いなくここは巨大コンピュータがいたところだ。巨大コンピュータがどこかへ移動したんだ】

目が慣れてきてもふたりには何も見えない。

【とにかくノイズの発信源を探すんだ】

【でも、ノイズは消えているわ】

【上空に移動しよう】

ふたりの身体がわずかに緑色に輝く。しかし、輝きはすぐに消えてしまう。

【移動できない！】

【変だわ】

ふたりの身体の輝きが消える。真美の手首がわずかに輝く。

【瞬ちゃん！わたしたち一日ずれて移動しているわ】

真美が瞬示に腕時計を差し出す。しかし、瞬示には真美の腕時計の見方がよくわからない。

【どちらにずれているんだ？】

【未来に】

【それでノイズが消えたのか。少なくとも一日先の世界ではノイズが存在していないというところか】

【なぜかしら。空間移動しただけなのに、時空間移動してしまっている】

【ノイズのせいか】

【一日前に戻らなければ】

ふたりは神経を集中するが何の変化も起こらない。

【時間島をコントロールできない】

【瞬ちゃん！あれは】

上空に鮫かシャチのようにも見える黒いものが見える。そのとき、突然ふたりの目の前が明るくなる。赤い炎がぎらぎら燃えている。

【なんだろう】

瞬示がひるむ。ふたりの前には怪しい赤い光を放つ火炎土器が空中に浮いている。

【瞬ちゃん！】

【マミ！】

ふたりの身体がどんどん小さくなって火炎土器に吸いこまれてしまう。

\*\*\*

一太郎と花子と忍者が大統領府に向かう。そのあとをケンタとミリンが住職とリンメイをかばうようについていく。全員に一太郎と花子が開発したノイズ遮断プログラムがすでにインストールされている。

「わしらにかまわず、先に行ってくれ」

住職がせきこみながら怒鳴る。

「わかりました」

ケンタとミリンは全力で走りだすと前方で立ち止まっている一太郎たちを見つける。

「どうした？急がないと」

ケンタが一太郎の背中に向かって叫ぶ。忍者は全員電磁レーザー忍剣を構えている。その先にはエアカーが止まっている。そのエアカーからRv26が降りてくる。

「これに乗ってください」

Rv26が手招きする。

「安心してください。ワタシは味方です」

一太郎が躊躇する。忍者は構えを崩さない。

「ありがとう！」

明るい声をかけたのはミリンだった。跳ねあがったエアカーのドアからミリンが乗りこむと強引にケンタを引きずりこむ。Rv26が一太郎たちがやってきた方向を指し示す。もう一台

エアカーが近づいてくる。そのエアカーの窓に住職とリンメイの上半身が見える。

「分乗してください」

R v 2 6 の声に一太郎と花子と四貫目とお松がエアカーに乗りこむ。残りの忍者が住職とリンメイが乗っているエアカーに乗りこむ。

「大統領府に急ぎましょう」

R v 2 6 が運転席に座る。

「シートベルトを！」

エアカーが浮きあがると一直線に大統領府に向かう。大統領府のセキュリティシステムはまったく反応しない。エアカーを大統領執務室の窓に横付けすると R v 2 6 が飛びだし、窓ガラスに体当たりして中に入る。そして窓から手を差しよべて一太郎から順番に部屋の中に招き入れる。忍者は跳躍して部屋に飛びこむ。

一太郎がパームコンピュータのコードをキャミの髪の毛をかき分けて無言通信チップの端子につなぐと、ノイズ遮断プログラムをインストールする。花子もミトに、お松がドア付近で倒れているホーリーにインストール作業を開始する。忍者もインストール作業を手伝う。

やがてキャミ、ミト、カーンが頭から手を離す。

「頭が割れそうだったわ」

R v 2 6 が一太郎の方に向いて手を差し出す。

「そのパームコンピュータを一台貸してください。その中のプログラムをインターネットで配信します」

一太郎が残念そうに首を横に振る。

「このノイズ遮断プログラムをインターネットに配信しても強力なノイズの引き起こす頭痛で、とても自力でインストールする余力が人間には残っていない。ひとりずつインストールするしかない」

「わかりました。それなら、まず、インターネットですべてのアンドロイドにそのプログラムを送信して、アンドロイド一人ひとりが人間にインストールしていきましょう」

「なるほど」

一太郎がパームコンピュータをR v 2 6に手渡す。R v 2 6の左肩からケーブルが伸びて、パームコンピュータの端子につながると両耳が赤く点滅する。そして無線でアンドロイドに宇宙戦艦で地球上のすべての人間にノイズ遮断プログラムをインストールするように命令する。

「お父さん、お母さん」

ミリンがホーリーとサーチにかけよる。

「大丈夫だ」

ホーリーがミリンを抱きしめる。キャミは乱れた髪の毛を整えるとコンピュータを操作するミトに近づく。

「アンドロイドの力を借りても、すべての人間にインストールするのに最低五日はかかる」  
ミトの言葉がガラスのない窓から侵入してくる重低音に押されて聞きとれなくなる。五〇隻近い宇宙戦艦が発進する音が残った窓ガラスに共鳴する。

「何て言ったの？ミト」

「手分けしてインストールしていたのでは間に合わない！」

ミトの言葉にキヤミが悲痛な表情を浮かべる。追い打ちをかけるように卓上のスピーカーから、地球連邦軍司令部のアンドロイドの報告が流れる。

「大統領！ノイズでショック死する者が続出しています」

\*\*\*

「とても、人海戦術では間に合わない」

ミトが窓に近づいて港を見ると宇宙戦艦が一隻だけ残っている。

「あれはワタシが艦長を務める戦艦です」

「どう思う、R v 26」

ミトはすでにR v 26を全面的に信頼している。

「ミト司令官のおっしゃるとおりインストールには五日はかかります」

「アンドロイドがいくら頑張ってくれたとしても助かる人間の数はしれている。ノイズの元を断たなければ人類は壊滅的かいめつな被害を受ける」



「降伏すれば、ノイズは停止するはずです」

「降伏なんかできない」

「インストール作業を中止してすべての宇宙戦艦を動員して前線第四コロニーの巨大コンピュータに戦いを挑んでも負ければ人類は滅亡してしまう。それに五〇隻ほどの宇宙戦艦で攻撃を仕掛けても勝つチャンスはわずかです」

Rv26の意見にミトが肩を落とす。それまで黙っていたキャミがRv26に近づくと真正面に立って見上げる。

「Rv26の戦艦では生命永遠保持手術ができると聞きましたが、本当ですか」  
「生命永遠保持手術が可能な宇宙戦艦はワタシの戦艦のみです」

「あの宇宙戦艦を動かせる最低の人数のアンドロイドに戦艦に戻るように指示しなさい」  
Rv26が驚いてキャミを直視する。同じく驚くミトがキャミに問いかける。

「どうするのですか」

「前線第四コロニーに行きます」

ミトではなくRv26がすぐさま反対する。

「無謀です」

「命令です」

「わかりました」

R v 26 が耳元を赤く輝かせると瞬示と真美の言葉を思い出す。

——やってみなければわからない

——人間はあきらめないわ

「ミトと行きます。カーン、大統領に任命します。あとの人選は任せます」

「キヤミ、いや、大統領、R v 26 の言うとおりの無謀だ」

カーンがキヤミの前に進みでる。

「大統領は残ってくれ。わしが行く」

カーンがキヤミの手を取って大統領の椅子いすに連れ戻そうとする。

「ミトも残れ！」

カーンの顔が真っ赤になる。脳裏からキヤミと真っ向から戦っていたころの記憶がまったく消え失せるどころか、カーンは人類を守るために進んで犠牲になってもいいと興奮する。キヤミもまるで長年の戦友のようにカーンを正面から見つめる。

「ふたりがいなければ人類は誰を頼りにして生きていくのか、よく考えろ」

「そのとおりだ」

ホーリーがカーンに同調する。サーチがいやな予感を抱いてホーリーを見つめる。

「ミトの代わりに俺が行く」

ホーリーが一步前が出る。

「私も行く」

「サーチは残るんだ」

「わし、ひとりでいい」

カーンがひととき大きな声を出す。

「だめです。ひとりでは孤独が判断を狂わせませす。それに俺には前回ミトとともにやつらと戦った経験がある」

ホーリーがカーンをいさめる。キャミはカーンの手を振りほどいて机の上に両手をつけて身体を支えながら唇をかむ。その唇から血がしたたり落ちる。そして両腕を少し浮かせると力一杯机をたたく。机の上の血が飛び散る。

「カーン、ホーリー、R v 26とともに宇宙戦艦で前線第四コロニー攻撃を命じます。すぐ準備にかかりなさい！」

ミトは何も言わずに直立不動の姿勢を取ると、キャミが一番重いものを背負ったと感ずる。しかも同じものを自分もいっしょに背負ったとはつきり自覚する。

カーンとホーリーがキャミに敬礼したときミリンが声をあげて泣きだす。涙を流しながらキャミをにらみつけるミリンをサーチが抱きしめてホーリーを見つめる。

「宇宙戦艦で生命永遠保持手術を受けるのでしょ。それなら私が必要になるわ」  
サーチがかすかな期待を持つ。

「いいえ、ワタシが手術をします」

R v 26の冷ややかな声がする。

「えー、アンドロイドに手術ができるの！」

「宇宙戦艦の生命永遠保持手術の設備はワタシが制作しました。それにあのときサーチさんやリンメイさんから手術の仕方を学習しました」

サーチはジャストウエーブ社の上空に浮かぶ宇宙戦艦で生命永遠保持手術をしたことを思い出す。キャミはうなだれたサーチを見つめるとガラスのない窓の横にいるR v 26に近づく。

「R v 26、あなたにすべてを任せるわ」

そして、キャミは背中で命令を確認する。

「すぐに出航しなさい。最後の最後まであきらめません。すべての責任は私がかかります。それに……無駄死には絶対に許しません」

「わかりました」

ホーリーがその窓の外のエアカーに乗りこもうとキャミの横を通りぬける。キャミが泣いているのがわかる。キャミはホーリーの視線から涙を隠すように敬礼する。

「俺はどんなことがあっても約束は守る。必ず戻ってくる」

ホーリーが極力明るい声を出すとサーチにぎこちなくほほえんでみせる。サーチも何とか満面の笑みを返してとりあえず合格点をホーリーに与える。

ホーリーがエアカーに飛び乗る。そしてカーンが続く。最後にR v 26が飛び乗ったときエアカーが少し沈む。すぐに音もなくエアカーは上昇して銀色に輝く宇宙戦艦に向かって速度をあげる。

「おとーさーん」

ミリンの鈴が鳴るような悲しい声がホーリーの耳にいつまでも残る。

## 第四十三章 ノイズ